

滋賀県におけるタウナギの定着と今後の拡大防止にむけて

金尾 滋史

(滋賀県立琵琶湖博物館)

タウナギ *Monopterus albus* はタウナギ目タウナギ科に属する淡水魚類である。本種は中国大陸南東部、朝鮮半島、台湾、東南アジア諸国と琉球列島に自然分布する。特に琉球列島に分布するタウナギ属の 1 種 *M. sp.* は他地域の集団から分化した集団とされ、環境省レッドリスト 2020 では絶滅危惧 IA 類に位置付けられている。

その一方で、本州では 1900 年頃に大陸から持ち込まれた個体が逸出・定着したと考えられており、現在、近畿地方、四国、東海地方、関東地方などで確認されている。近畿地方では特に奈良県や京都府などで古くから定着しているが、滋賀県における確実な記録は 1983 年 11 月 27 日に日野町で採集され、琵琶湖文化館に持ち込まれた 1 例の記録があるのみであった。そのため、本種はこれまで滋賀県では定着していないと考えられていた。

そのような中、2013 年 1 月に琵琶湖博物館フィールドレポーターをしていた親子から、大津市内の公園内の水路で採集したタウナギを飼育しているという情報提供を受けた。同年 3 月に当該個体を確認したところ、形態的にタウナギであることが確認された。この飼育個体は 2012 年夏に採集された全長約 150mm 程度の個体であり、同サイズの個体が複数確認されていたことから、本種がこの水路で繁殖している可能性が示唆された。そこで、同日中に当該水域におけるタウナギの生息調査を実施した。公園内の水路およびその上流にある小規模な調整池を調査した結果、全長 530mm の個体をはじめとして、複数の年級群が確認された。また、同年 12 月の調査では、全長 60mm～256mm の個体が採集され、小型の個体は当歳魚、全長 200mm を超える個体は少なくとも 1 年以上が経過した個体であると考えられた。これらの個体は公園内を流れる水路の底にたまつた泥の中では確認されず、いずれも水際にある泥中や石の下などから発見された。その後も調査を継続していたところ、2017 年 10 月に主にガマ類などの抽水植物の根の間や泥の中から複数の年級群と考えられるタウナギが確認され、それ以降も散発的ではあるが、大型の個体が同水路や、さらに上流側にある庭園池内でも確認された。また、この公園から流出する水路においても、本種が発見され、下流域への分散が示唆された。

これまでの調査において繁殖可能な大型のオスおよびメスの成魚が採集されたこと、また、当歳魚と考えられる小型の個体が多く採集されたことから、複数の世代がこの水域に生息していると考えられ、タウナギはこの公園内の水路や池に定着していると考えられた。公園内の水路は人工的に作られたものの、泥が堆積して抽水植物が多く繁茂していることからタウナギの生育や繁殖に適している。今後も放置しておけば個体群が拡大していくと考えられる。また、この公園の水路から流出する河川は市街地を流れ、その後琵琶湖へ流入する。現在のところ、下流域において多くの個体は確認されていないが、これは本種が夜行性

かつ泥中でくらすため、昼間のタモ網による採集が困難なこと、また河川内はヨシなどの抽水植物が繁茂しているため、夜間の目視調査でも個体の把握が難しいことが要因となっている。

本種は肉食性であり、特に小型の水生生物を捕食する。そのため、侵入した地域では、在来種の捕食による影響が懸念される。さらに、水田地帯に侵入した場合には、巣穴を掘る習性により畦に穴をあけるなど、農業被害が生じる可能性もある。本種は滋賀県外来種リスト2019においてすでに「中影響外来種」として位置付けられているが、定着の確認からすでに十数年が経過した現在、まだこの水系以外での確認はされていない。しかし、他地域においても容易に定着が可能な水域は多いと考えられることから、今後も十分な注意が必要だろう。

今回の発見は琵琶湖博物館フィールドレポーターが第一発見者であり、県内未定着の外来種の生息状況を把握することができた。このように博物館は地域のさまざまな自然史情報が集約される場としての機能も果たしており、時として何気ない生物の飼育の話から新たな知見や分布情報を生み出すこともある。本種は特徴的な形態をしており、記録写真があれば専門家による同定もほぼ確実に可能である。今後、県内の他地域で発見された場合もこのような地域の方々からの情報が非常に重要になると考えられる。

なお、興味深い話として、田中（1910）が琵琶湖産魚類の追加を報告した際、方言「ミヅヘビ・ゾコヘビ」と呼ばれる種について「？」がつきながらも *Monopterus albus* としている。残念ながら田中（1910）が参照したとされる江戸時代後期の書物は現在、存在していないようで、それが何を指していたのかは不明である。しかし、「水ヘビ」は江戸時代後期に記された『皇和魚譜』にも登場し、「琵琶湖ニ多シ」「腮ナク（腮が「えら」なのか「あご」なのかは不明）」とも書かれている。ただし、描かれている魚にはタウナギの成魚にはない胸鰓やウナギのような丸い尾鰓が見られ、一見ウナギ（ニホンウナギ）にも見える。これが本当にタウナギのことを指しているのであれば、明治時代以前にも持ち込まれていたことがある。しかし、記載内容や図の形態的特徴から判断すると、実際にタウナギであったかどうかは現時点では不明である。